第２回公開フォーラム記録（その１）

「住みごたえのある町」をつくる
～映像で見るハンブルクのまちづくり～

日時：2012 年 3 月 4 日（日） 13.30～15.30
場所：大阪市立住まい情報センター　研修室

報告者：
　大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）
　高梨 友宏（大阪市立大学准教授）
　海老根 剛（大阪市立大学准教授）
司会：
　北村 昌史（大阪市立大学教授）
　久堀 裕朗（大阪市立大学准教授）

久堀：それでは定刻になりましたので、「映像で見るハンブルクのまちづくり」を始めたいと思います。私、司会の大阪市立大学文学研究科久堀と申します。よろしくお願いいたします。プログラムがこのピンクの紙に示してございますので、ここに記載されている通りに進めてまいりたいと思います。このプログラムの一番上にありますけれども、この研究プロジェクト、大阪市立大学の都市問題研究というプロジェクトでこれまで 3 年間続けてきたものです。3 年目で今回総括の報告会といった位置づけになります。それでは、その全体のことについてはまた、プログラムの中で、研究代表の大場先生の方からお話もございますので、さっそくプログラムの方、進めてまいります。

　それから中に質問用紙が一枚、はさみこんでございますけども、これはプログラムの最後の、一応時間の目安で 3 時からになってますけども、質疑応答の時間を受けてございまして、この前に休憩時間をちょっととりますので、この間に外の受付のところで箱を用意してございますので、その中に休憩の間に入れていただいて、あとちょっと目を通して、質疑応答の時間を取りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。それではプログラムの第一番目ですけど、今年度、去年の秋に行いました、ハンブルクでの国際シンポジウムの内容の報告を、文学研究科、高梨友宏先生にお願いいたします。

高梨：本日は皆様、お忙しいところお集まりくださいまして、ありがとうございます。私、紹介ございました、高梨と申します。最初に、今日はハンブルクで行われました、シンポジウムについての内容のご報告をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。2011 の 11 月 1 日にハンブルクの HCU におきまして、我々都市問題研究のメンバーによる、国際シンポジウム「住みごたえのあるまちをつくる　大阪・ハンブルク

におけるエリアマネジメント」が行われました。本日の公開フォーラムの初めに、このシンポジウムに関する報告をさせていただきます。シンポジウムは大阪市立大学の研究グループのメンバー3 名による報告と、それに続く公開討論の 2 部構成をとりました。前半の報告会での報告者は、報告順に北村昌史教授、私、高梨、そして木戸沙織研究員であり、それぞれの報告に対するコメンテーターとしてハンブルク側の研究者、研究協力者 3 名、すなわち HCU のディルク・シューベルト教授、ハンブルク都市開発再生機構のクルト・ラインケン氏、そして同じく開発再生機構のハンス・ヨアヒム・レスナー氏が担当いたしました。後半の公開討論では大阪市立大学の海老根剛准教授とハンブルク大学のガブリエル・フォウクト教授の司会進行によりまして、報告者、コメンテーターの 6 名と会場の参加者の間で討論が行われました。以下、3 名の報告者の報告内容の概要と、討論における議論の要点について簡単に紹介させていただきたいと思います。

まず、最初の北村昌史教授による報告、「九条とその周辺の地域発展の歴史」では日独共同研究日本側のモデル地区である九条とその周辺地区の江戸時代から第二次世界大戦の前夜までの歴史が取り上げられました。すなわち江戸時代に、この地域に人工的な運河である安治川が開削されて以来、新田開発地、まぁ農耕地の事ですが、新田開発地となった九条地区は明治維新の年、すなわち 1868 年の開港とその後の大阪への編入により、税関が設置され、外国人居留地が形成されるなど、大きな発展を遂げます。しかし、九条川口地区は河口から離れていたため、大型船の入港に適さず、商船の出入りは次第に神戸港に集中するようになり、この町は港町として振るわなくなります。さらに欧米諸国との不平等条約の撤廃により、追い打ちをかけるように外国人居留地も廃止され、開港当時の活況は一気にさびれてしまい、第 2 次世界大戦まで続いた松島の遊郭だけが当時の繁栄をとどめる存在となりました。もっとも 1903 年の港の再開発、再整備を機に鉄工業者としてそのころから頭角を現した西山卯之助、この人は 1875 年から 1954 年までの方なんですが、この西山卯之助の尽力により、九条とその周辺地区は鉄工業の町として生まれ変わります。1901 年からの 10 年間でこの地区の人口は倍増し、路面電車の開通や安治川トンネルの建設など運輸面での便宜も整備され、目覚ましい発展を遂げています。九条地区は大阪の経済的基盤を支えるまでになりました。第二次世界大戦前夜には九条地区の鉄工業のおかげで、大阪は「東洋のマンチェスター」とさえ称されたのですが、それも第二次世界大戦時の空襲で壊滅状況に陥り、戦後は戦前の経済基盤を回復することなく今日に至っております。北村教授の報告では以上のような九条とその周辺地区の栄枯の歴史が紹介されました。

続いて私、高梨が「大阪市におけるフンデルトヴァッサー建築についてーその現状と課題ー」ということで、大阪湾に人工的に作られた島の舞洲に建設されたオーストリアの芸術家、フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏のデザインによるごみ処理工場などの建造物をめぐる状況について報告を行いました。自然と人間の関係回復、あるいはエコロジカルな建築というものをテーマにするフンデルトヴァッサーに対し、大阪

市は 1996 年にごみ処理工場、およびスラッジセンター、スラッジセンターというのは下水とか汚泥を処理する施設ですが、このごみ処理工場とスラッジセンターの外装デザインを委嘱しました。それは 2008 年の夏季オリンピックの大阪誘致と一体の構想であり、首尾よく誘致が実現すれば、本土から舞洲にかけられた橋のたもとの両側に位置するこれら二つの建築物それぞれに敷設された巨大な二つの煙突があるわけですが、これらはオリンピックのメイン会場となるはずだった舞洲に訪れる、世界中からの来客を迎えるゲートの役割を果たし、エコロジーと芸術に手厚い日本第二の経済都市大阪をアピールするはずでした。これがスラッジセンターの外装です。で、その橋の上から見た様子なんですが、ちょっと見えにくいですが、左の方にごみ処理施設の煙突が見えておりまして、右の方がスラッジセンターの煙突でございます。しかし、オリンピックの誘致は失敗に終わり、舞洲の開発はスポーツアイランドとしても、民間企業の倉庫群を要する島としても中途半端なものとなっております。結果としてマスコミからバブル期の公金の無駄遣いの象徴のように非難されるような存在となったフンデルトヴァッサー建築は、しかし彼自身の建築理念の通り、それ自体として見れば人々を引き寄せ、憩いの場を提供し、人間性を回復する力を持つものであると思います。それにもかかわらず、現状では社会見学の小学生やフンデルトヴァッサーに特別に関心を持つ一部の人々以外には訪れる人はほとんどいないという状況です。このことは単に、オリンピックの誘致の失敗が招いた結果というわけではなく、その後の行政側の対応にも問題があると思われます。縦割り行政の改善、アクセスの改善、NPO 法人などとの連携、フンデルトヴァッサーの芸術に対する啓発活動などの課題を果たすことで、高い買い物を観光資源に転換することも可能ではないかと考えます。そのような提言を含む報告をいたしました。

そして 3 番目が木戸さんの報告でございますが、タイトルが「若者にとっての住みごたえのあるまちー住む・働く・楽しむー」です。古くなった住居や歴史的な近代的建築物をまったく作り変えるのではなく、むしろ改装したり、新しい用途に用いたりすることで、現代の若い世代にアピールするというようなまちづくりを行っているような事例を、住むことに関しては阿倍野の古民家の再生から。これが今写っておりますのが、阿倍野の古民家、長屋ですね。これが改修前ですけど、改修後はこのようになったと。もう一度改修前が来まして、改修後になったと。それから働くことに関しましては、船場のオフィス街の近代建築の再利用というのが取り上げられました。それから三つ目の楽しむことに関しては、かつて水運利用によって材木の町として栄えた、堀江地区。西区の堀江ですけども。堀江地区が世代交代により若者が好んで集う新しい町へと転換されたことからそれぞれ紹介しております。まぁ堀江の新しいブティックが登場したり、カフェなんかが登場しております。いずれのケースも住民や建物の所有者が民間の人々のアイディアとイニシアティブによって、いったんは廃れてしまったり、古くなってしまったものに、新しい意味を付加し、別の用途を見出す試みに成功し、地区の再活性化を達成しているような事例であります。大体ざっとそういうような話をされました。

そして、後半の公開討論の方に移ります。次に公開討論の若干の論点について紹介させていただきます。ここにございますように、クリエイティブなまちづくりについて、そしてまちづくりに関する芸術家のかかわりについて、それから地域の人々を結びつけるものについて、そしてハンブルクと大阪双方の町にとって、住みごたえのある良い都市をつくるには何が必要なのか、というようなことについてそれぞれ議論が交わされました。

まず一点目のクリエイティブなまちづくりについての中では、こういうことが言われました。ハンブルクにも古い町を新しい町に活性化するという、大阪の事例と同様の試みがなされている。そのイニシアティブをとるのは、個人の場合もあるが、市とか行政の場合もある。この点についてもハンブルクと大阪には共通の点が見いだせるという意見が出ました。

二つ目のまちづくりに関する芸術家の関わりについてという事ですが、これはハンブルク側からこういう意見が出ました。つまり、クリエイティブなまちづくりにおいて芸術家の力は大きい。しかしドイツでも日本でも芸術家たちは大都市に集中する傾向にあって、その点は問題だと。この意見についても双方論点が共有できたという事でございます。これに対して、反論が出まして、都市再生のエネルギーはアーティストだけの専売特許ではなく、もっと深いところから出てくるのではないか。たとえば祭りのような、人々を結びつける歴史的、地域的起源をもつものが、人々を引き寄せ、都市を再生させるエネルギーを発揮するのではないかという意見が出されました。

その点から次の論点が出てきたわけですけども、地域の人々を結びつけるものが一体何なのかというところにいろんな意見が出されました。これは、こういうような概要です。これはハンブルクに住んでいる日本人の方がおっしゃった意見なんですが、日本には江戸時代に五人組の制度があったように、昔から地域の自治組織が力を持ってきた側面がある。またそうした側面が発揮される場として祭りがある。あるいは、地域のアイデンティティを形成するようなものとして、現在でもご当地グルメですとか、ご当地名物のようなものがある、というような意見が出されました。

またそれに対して、ある意味では反論なんですが、最後の司会者の問いかけに対しての意見ですが、大阪とハンブルク双方にとって住みごたえのある良い都市の発展のために何が必要と言えるのかという司会者からの問いかけに対して、日本人の側からこういう意見が出ました。ちょっと長いですが、「日本の祭りには互いに助け合い、人々を結びつける仕組みがあるという意見が出たが、現代の都市部の生活では実際にはなかなかそうした助け合いの関係は見られない。しかしちょっと前の神戸の震災の際には助け合いの精神が自然に生じた。これは伝統的なもの、地域に根差したものというよりも困っている人がいれば助けるという一般的、道徳的な問題ではないか。してみれば、住みごたえのある良いまちづくりのために必要なのは道徳的、理性的な判断に基づく行動ではないか。地域に根差した、祭りや宗教的な集団などを背景とする互助性は、それになじま

ない個人や他の集団を排除したり、差別したりする側面を持つ。住みごたえはそもそも誰にとっての住みごたえなのかという問題がある。オールドカマー、古くからの住民にとってはそこに住むことに住みごたえがあって当然で、むしろニューカマー、新しく来た人の住みごたえを追求することの方が重要ではないのか。そのためには伝統的なものに依存するのではなく、むしろ普遍的なもの、人間の共通性に基づく理性的な判断を生かすべきではないか」という意見が出ました。

　それに対して、ハンブルク側のドイツ人の研究者の側から、ハンブルクも同様のことが言える。ハンブルクの人口が増加している今、共同体の内部構造の変化は避けがたいものである。またドイツでもたとえば震災のような外的要因によって、隣人同士の協働が図られるのではないかというご意見です。現代は住民参加の方向性が見えにくい、見えない時代であるが、だからこそきちんと機能する住民参加の形態を模索することが肝要である。というご意見が出て、概ね時間が来て締めになったという事です。まぁはっきりとした結論が出たわけではございませんでしたが、以上のような討議が進められ、無事に終了したという次第でございます。以上を持ちまして、私の方からのハンブルクのシンポジウムに関するご報告を終えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

久堀：それでは続きまして、プログラムの二つ目ですが、ハンブルクにおける都市再生の事業について、まず研究プロジェクト代表の大場先生の方からその概要を説明いただいて、そののち、ビデオ上映と書いてございますが、映像を交えまして海老根剛先生に説明を加えていただきます。しばらくお待ちください、機材の準備をしますので、、、

第２回公開フォーラム記録（その２）

報告者：
　大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）
　高梨 友宏（大阪市立大学准教授）
　海老根 剛（大阪市立大学准教授）
司会：
　北村 昌史（大阪市立大学教授）
　久堀 裕朗（大阪市立大学准教授）

大場：お待たせいたしました。研究代表をやっております、大場でございます。これからビデオを見ていただくわけですけども、それに先立ちまして、ドイツ並びにハンブルクにおける都市更新事業のあらましについてこちらから簡単にご説明いたしたいと思います。みなさんにはA3でプリントアウトしたものがございまして、ちょっと小さくて申し訳ないんですけど、それを適宜ご覧いただきながら、聞いていただければと思います。

　こちらにですね、ドイツにおける都市更新事業がかつてと現在とどのように変わってきたかという事を簡単にまとめておきました。で、まぁ日本とよく似た傾向にあるわけですけども、ここにありますように、1980年代の初めあたりから、特にハンブルクは先進的なところではあったんですけども。徐々にそれまでの言わば面的な開発ではなくて、少しずつ段階的に変えていく。改修ですとか、保全ですとか、そしてそのコミュニティの維持というものに力点を置いたような、そういう、この下に書かれてございますけども、再開発による復興から持続可能な都市更新へと、そのようなところに動いて行ったわけです。そういう中で現在行われている地区更新プロジェクトにどのような特色があって、どのような問題があるのかという事なんですが、一番上に東西両地域のドイツとも、いろんな取り組みがドイツの統一以降、90年代の終わりから現在にかけて行われているわけです。もう一つは、そういったコミュニティを維持すると言いつつも、実際には目に見えて効果は挙げられるようなそういうプロジェクトが先行しているという事。それから、どのような場所でそう言ったものが行われるかというとですね、もちろん地区によっていろんな違いはあるわけですが、大きく分けまして一つはインナーシティに相当するところ、一つは縁辺部の住宅団地、そういう風に大きく分けられまして、それぞれ更新の仕方は変わってくるだろうと。これは後で表が出てまいります。そして一番下、これはむしろ問題点と言われるものだと思いますが、施策の担い手というのは、一方で行政の思いと、他方では現場で地区のマネジメントを担当しているマネージャーとの、つまり直接住民に接している人たちとの意識の違い。でありますとか、それからですね、もう一つは非常に重要なところだと思いますが、日本ではなかなかピンとこないんですけども、ハンブルクをはじめとするヨーロッパの都市の場合ですと、いろんなエ

スニシティなり言語文化をバックグラウンドとする集団がまじりあって住んでわけですね。お互いに交流することなく。したがってフラグメント化って言うことは断片化しているという事なんですけども、そういう住民層をどのようにして動員すべきか、ということが問題になります。これはハンブルクでどのような形で都市更新事業行われているかという類型ですので、先ほどドイツ全体で行われているプログラムと対比してもらえればという事ですけども、時間の関係がございますので、簡単に言いますと、面的な再開発以外にこのようなハード中心の施策もあればソフトの施策も含むようなものもありますよと、そういうことで場所によって、地区によってそれぞれ応じたものがなされているという事です。

その都市更新事業の特徴という事なんですけども、そのターゲットというか、直接問題となってくるのは、こういったアルトバウという 1949 年よりも前、第二次世界大戦前に建設された建物がなかなかその改修が進まない。大きくその後の道というのは三つに分かれておりまして、一つは手の付けられないまま、放置されてさらなる衰退が進むケース、二番目がいろんな都市で起こっているところなんですけども、そういったところに人を再び呼び起こすために改修をしましょうと。ただ改修をしたら、経営上はプラスになりますけども、元いた住民は住めなくなります。こういうような住民が入れ替わる現象のことをジェントリフィケーションというわけですけども、私たちが実際ハンブルクで見た例はこういった一番、二番の例ではなくて、三番の第三の道。具体的にどのような方法があるのかというのは後でいろんな活動が出てきますけども。それは一言で言いますと、通常の改修であれば、家賃が上がってしまって住民が交替せざるをえないわけです。そこを何とか比較的価値のある、価値のあるというのは建築上ですね。価値のあるような建物を残しながら、それは日本の場合だったら長屋だとか、そういうものに相当するものだと思いますけども。それを残しつつ、そこに今まで住んでいた人たちが無理なく住み続けられる、そういった道を探っていく、という事になります。

で、具体的にこれからハンブルクでどういったところを見ていただくのか、二つの地区についてみていただきます。一つは、事例一、ヴィルヘルムスブルクというところ。ここはハンブルクの都心の部分、中世以来発展した都市になります。ここのところにちょっと見えてるのは有名なアルスター湖という。ハンブルクという町はですね、他の町と違って都心のすぐ近くに湖があります。それからですね、ここがこれからお話しするヴィルヘルムスブルクという場所なんですけども、これは中洲です。で、人が住んでいる中洲としてはヨーロッパ最大のものです。都心に隣接する地区でありながら、エルベ川っていうのは雪解けの頃に上流から大量の水が流れてきますので、水位が上がって水害の常襲地であるわけですけども、そういったために土地はこういう形で広いんですが、ほとんど利用されない、そういった場所が多い。そういうエルベ川の中洲の再生事業を IBA という、そういうようなプロジェクトがドイツにありまして、それで約 6 年、7 年にわたり開発が行われてきました。で、左側の写真が「IBA ドック」という、そこに実際

にプロジェクトの概要が説明されている場所です。それで、これは右側はハンブルクの街中の IBA の PR のモニュメントですけども、ここでは三つのテーマ「コスモポリス」、「メトロポリス」、「気候変動と都市」こういったものをテーマとして、実際の事業が行われています。以下のビデオではそういったものの、具体的なものをご紹介していくという事になります。

それから二番目のビデオの対象地は、グローセベルクシュトラーセといいまして、これはハンブルクの中央駅とは別に特急列車の終着駅でアルトナという、もともとは独立した別の行政市だったんですが、この地区の中心商店街がグローセベルクシュトラーセという通りなんです。ここは 90 年代半ばより非常に衰退が目立っていたわけですけども、そこを 2005 年以降再開発地区として、徐々に変化が始まっているという事例です。一つの変化が何かというと、こちらがアーティストですとかクリエイターを誘致する活性化なんです。一方で、右側のこの写真がクリエイターを誘致したアトリエですけども、左側は IKEA です。現在建築中なんですけども、あの有名な IKEA がこういった市街地の中に入ってきていて、それでもちろん市民にはいろんな意見があるわけですけども、そういった IKEA の進出をめぐって新たな展開が見られる。そういった場所です。それでは以下、ビデオを見てください。

【ビデオ準備】

海老根：ここからはですね、前回 2011 年の 11 月に取材をしてきたビデオを皆さんにご覧にいれます。で、ですね、やや字幕が多いんですけども、ちょっとスクリーンが小さいので、適宜止めたり、音を小さくしてこちらの方で補いながら進めて行こうかと思います。今回は IBA という巨大な一種の都市再生プログラムの場所を見てきますので、実は結構模型とかですね、まだ建っていなとかですね、結構その辺は多いので、適宜補いながら見て行きたいと思います。なお、ここでかなりたくさん話されている事柄を要約してますので、もしドイツ語できる方は語ってる内容と字幕があってないんじゃないかという人もいるかもしれませんが、そういう事情だと思ってください。この短い時間に収めるためにそういうことをしています。

【ビデオ再生】

海老根：ここが最寄駅です。ここからですね、さっき言った中洲地帯になります。ここから今、さっきも出てきましたけども IBA ドックという運河に浮いているパビリオン、そこに向かっています。そこで IBA のスポークスマンと言いますか、文化政策担当の方からレクチャーを受けることになります。これが浮島なんですね。この建物自体も一つの提案で、洪水の多い地帯でどんなふうにこれから暮らすかっていう、ケースですね。1962 年に大洪水があってですね、それ以来ここの開発が止まってしまったという事ですね。で、この洪水の結果、それまで住んでいた裕福な層が皆その土地を去ってしまった。それに対して移民の人たちが入ってきた。そこで社会構造が大きく変わってしまったという話です。現在 55,000 人の住人がいて、40 か国以上からの出自を持つ住民が住んでい

るという事です。2000年代に入るまで、一種の問題地区だったという事になっています。失業ですね、あるいは学校をやめてしまう子供がすごく多いですとか、あるいはエスニシティの異なる多くの人が共存することから来る問題、そういうものが山積していたという事です。で、これがIBAのパビリオンですね、このIBAという場所はHbf、中央駅から8分なんですけども、あまり都心の人が行かないので、都心の中にこういうインフォメーションセンターみたいなものを作って広報しているという事です。

ここからはですね、今回のIBAの三つのテーマを説明しています。第一のテーマは「気候変動と都市」というテーマです。まぁどうやって気候変動に都市が対応していくか、あるいは環境問題に都市がどう対応していくのかという事です。二番目のテーマは、様々な文化的背景を持った人たちが共存するそういう場をどうやって作っていくかというテーマです、これ「コスモポリス」って言います。要するにいろんな出自の人たちが一緒に暮らしていることを一種のポテンシャルと、チャンスととらえて行こうという事ですね。ですからこちらはソフト面ですね、コミュニティをつくったりとか、文化、芸術をつくったりですとか。それで三番目が「メトロゾーン」というですね、ちょっとわかりにくいんですけど。いわゆる都市の近くにありながら、郊外的な風景を現出している地域を指しています。こちらの方は、建築なんかの計画も含まれているわけです。

ここからは、文化とか芸術がどういう役割を果たしていくかという話になります。クリエイティブ産業の育成とかですね、どんなプロジェクトをやっているのかを、いくつか紹介しています。で、ここに、今公園なんですが、4000㎡の場所があると。ここを改修して、クリエイティブ産業とアーティストの拠点みたいなスペースをつくろうという話です。こんな形になっていますね。これは改修後のイメージ図ということです。で、すでにオープンはしています。そうですね、今お話しありましたけど、そういうスペースをどういう風に安い値段でアーティスト、あるいはクリエイティブ産業のスタートアップ企業に提供するかという事で、IBAの方が市と30年間という長期の賃貸契約を結び、それをアーティストたちに貸し出すという形で、長い期間にわたって安い家賃を保証するという仕組みを作っているという話です。

次は、もっと小規模なワークショップのようなプロジェクトです。ここで言われているのは、クリエイティブ産業論はしばしばクリエイティブクラスと呼ばれる高学歴で、大学で美術を学んだような人を、問題地区のような所に住まわせることで地区を活性化していくんですけども、ここではそういう施策だけではなくて、クリエイティブ産業の育成とそこにある社会問題の解決をどうやって、結びつけて行くかということに特に重点を置いている、という事をこの方は強調していました。これと似たような試みは、大阪でも結構なされているのではないかと思います。まぁこういう形で、アーティスト、トルコ系やアジア系の様々な移民の人たち、そういう人たちは往々にして失業していることが多いんですけども、そう人たちに、たとえば好きな言葉を聞くと。その好きな言葉を各自がモチーフにしてクッションをつくるというようなワークショップをしたとい

う事で、ここがその様子です。

今のところまでが簡単な概要でした。ここから、いくつかの例を見るために街に出て行くという事になります。ヴィルヘルムスブルクというところですね。このパビリオンでは様々な新しい住居モデルを展示していました。こういうコンセプトハウスのようなものを展示しているという事です。やや見にくいんですけども、ここの運河に家が浮いているのがわかると思います。こういう「ウォーターハウス」という、運河で水が上下してもそれにしたがって家が上下するというモノです。たとえばこれもコンセプトハウスです。これも実際建てようという事です。「ハイブリッドハウス」という事で、簡単に言うと、様々な用途に費用をかけずに適合可能な設計方法、建築方法という事です。用途が変わっても壊さないで使い続けることができるというものです。具体的には壁とかを自在につけたり壊したりすることで、何らかのプランを掲出できるという事です。これは「スマートマテリアル・ハウス」と言いますが、この外側にガラスのファサードがあって、ガラスが二枚あるんですね。その間に二酸化炭素が入った水を入れて、さらにその中に改装を配置して、ちょっと後で説明がありますけど、その海藻をシェードのような形で利用しつつ、二酸化炭素を解体しつつというようなコンセプトですね。かなり奇妙なコンセプトもあります。秋には化粧産業とかにその海藻を売れるんじゃないかという事です。それで天井にかかっている布のようなものが太陽電池ですね。

ここからは「コスモポリス」とさっき言いました、非常に多民族的な、多文化的な地区で、その場で新しい共同生活をつくるという場所ですけども、そこの中心としての「世界の街区」と呼ばれた一帯でのお話になります。ここは一種の広場になっているんですが、ここでアンケートを取ったところ、この辺の住宅は狭いので誕生会をやったり地域の集まりをしたりする場所がないという事がわかったという事で、そこで背後にある緑の建物ですけど、多目的なパビリオンを建てたんだという事ですね。で、ここの地区の住民には自由に申し込んで使うことができるということです。それで面白いのが、ここの運営を IBA がやるのではなくて、地域住民に完全にゆだねるという事ですね。でまぁここで住民が集まってですね、様々なイベントを催すことができるという事です。要するにまず、住民のニーズを調査して、そこに必要な空間を提供するというのがコンセプトです。これは、先ほどもちょっとお話がありましたけども、集合住宅ですね。アルトバウの集合住宅をリノベーションするという取り組みになっています。こちらが背景、裏の方ですね。裏側の奥行きを拡張して庭をつくるというリノベーションになっています。前の住民は一時期別の場所に移っていて、原則としてまたその人たちがそのまま戻れる、でしかも家賃はほとんど上がらないという形で行っているんです。そういう形で、ジェントリフィケーションみたいに住民を入れ替えるのではなくて、元の住民が新しく改善された住環境に戻れるように、市の方が家賃の上昇の差額の補填を行うというものです。

それで、ここに出てきたのが第二次世界大戦時代、ナチスドイツ時代に建てられた、

防空壕なんですね。巨大な防空壕です。これはイギリス軍に爆撃されたんですが、ビクともしないで、外壁こそ傷ついてますけど、中は全くビクともしなかった、そういうものです。そこをエネルギーシェルターとして、一種の発電装置みたいな形に再活用する、一種のコンバージョンですかね。これちょっとわかりづらいですが、これホントに巨大なものです。で、ここはもうつい最近まで全く使われていませんでした。壊しようにも壊せない、そういう代物だったんです。ここに写真があります。分かりにくいんですけども、この屋根の上にさっきの太陽電池になるようなもの張って、その内部が高ジェネレーション発電設備を入れたり、温水設備を整えたり、この地区のエネルギー供給の拠点となっています。地元のハンブルクの電力会社との共同事業です。これが将来、こうなるよって言うものです。この地域内でエネルギーを自給自足しよう、そういうことをやっています。

これは、また別のプロジェクトで、ハーフェンシティ大学の建築学科が行っている場所です。古い学校を使った一種のスタジオです。建築学科の学生たちが実際にこの建物を改修すると、様々な仕方で改修するという実習をしながら同時に宿泊したり住んだりしている、そういう場所です。まぁここでゼミをやったり、クリスマスパーティをやったりとそういうことをしているようです。で、重要なのは学生たちが地域住民と知り合うことから初めて、単に建築の勉強だけするのではなくて建てる場所の人とコミュニケーションをしながら建築について考えていくというものです。建築が計画を立ててそこに住民が参加するのではなくて、建築家の方が住民がどんな風に暮らしているのかというプロセスに入って行って、そこに必要な建物のコンセプトを練り上げていると、そういうことを学んでいると言っていました。

で、これが Steg という都市更新会社なんですが、そこがこの IBA の枠内で作っているオープンハウスと呼ばれるものです。これは賃貸と分譲住宅がまぁ一つになった特殊な建物であります。パッシブハウスって言うのは基本的には暖房なしで暮らせるエネルギー効率の良い住宅なんですけども、いわゆるコジェネというやつですね。まぁあのこういうエコ住宅の最新設備をすべて取り揃えた住宅になっています。150 万ユーロですから、かなり高額な補助が出てます。で、これはですね、さっき言った高ジェネレーション発電装置です。ガスですけども、発電するとともに、そこで発生した熱を右側にあります貯湯機に貯めて使っていくという形で生み出されたエネルギーをできるだけ使っていくという、そういうシステムになっています。まぁここに Bio Gas と書いていますね、だからバイオ燃料なんですね。で、ここはですね、いわゆる集合住宅なんですが、オープンハウスというコンセプトになってますんで、ここは共有スペースになっています。各戸がバラバラに暮らすんじゃなくて、お互いにコミュニケーションを取りながら住めるようにというコンセプトで建てられている建物です。ここで様々なイベント、上映会、パーティ、そういうものをできるように設計されているという事です。なのでまぁ、オープンハウスと呼ばれているという事です。都市の中に孤立して暮らすんじゃなくて、

コミュニティ感覚を持って暮らそうと、そういう集合住宅になります。で、中の様子ですね、まだ工事中です。この窓ですけれども、3 重のガラス窓になっていまして、パッシブハウスで木の窓って言うのは非常に珍しいわけですけども、3 重のガラスによってものすごく保温性能を高めていくという事です。この辺りはドイツならではですね。夏そんなに暑くないと、冬の寒さを考えればよいという感じです。で、その部屋で発生する熱というのも使いますので、集中管理式の換気システムというのが各部屋に常備されています。で、もちろん暖房要らないって言っても、全く要らないわけではないので、ついてるわけですが、こういう非常に薄いヒーターが設置されていまして、どこでも邪魔にならずにおけるという事です。これが断熱材です。ものすごく太いものが、これくらいのものが壁に入っているという事です。このあたりも日本と違うところですね、気候的に。

ここからはアルトナになりますけども、今出てたのが Steg という都市開発更新会社、非常にユニークな都市再開発を行っている会社ですが、そこの地区事務所です。この Steg というのは、必ず巨大なプロジェクトをやるところには、その場所に地区事務所を置いて活動をするんですね。それについての説明があります。まぁこれは非常に Steg の特徴的な手法です。で、ここからはアルトナ地区の再開発についてプロジェクト、その地区事務所の方が説明してくれます。ここの色のついたところがアルトナ地区になりますけれども、その右下の方に僕らがいます。ここにいるということ。そこが駅です、駅の西側がオッテンゼンで、非常に栄えています。そして、東側がグロースベルクシュトラーセという再開発地区になります。なので、まぁそれに対するテコ入れを行うという事になるんですね。もう一回ショッピングゾーンとして活性化するという事を目指しているという事ですね。まぁ IKEA が進出すると。ここに二つの建物がありますけども、今立ってる東側がフォールグですね、で、今指してる方がフラッパントという建物で、ここはもう解体されています。右側のフォールグは、お店が入ってたんですけど、今ほとんど出ちゃってると、今というか、この開発が始まる前はほとんど空き家になっていたという事です。空き家になっていたので、一階をアーティストに貸し出すという事を 2007 年から 09 年くらいまでやっていたという事です。で、その投資家が現れてフォールグの建物を買ってですね、そこをそれまでは事務所と住居が混在してたんですが、今は全部住居に変えてしまった、今その改修はまだ終わってないんですが、完全には。全部住居に作り変えるという事が行われているという事です。ものすごくきれいになっていますね。で、一階に生活用品関係の店が入ったので、またここに買い物に来る人が増えてきたという事ですね。

IKEA の進出には住民の間に賛否両論があるわけです。これを見ると分かるんですが、これが通りにできるとされている IKEA の建物です。IKEA の建物は大阪にもありまして、行ったことある方はわかると思うんですけども、IKEA っていうのは本来ブルーと黄色っていうのがトレードマークなんですね。建物みんな背面が真っ青で黄色で IKEA っ

て書いてあるのが世界共通、どこ行ってもそうなんですが。これをまち中でドカンとやられた日には、通りのイメージが壊れてしまうという事で、交渉して、これはちょっとわかりにくいんですが、角度を変えるとふつうにみていると灰色の建物なんですが、角度を変えると全面ブルーに見えるというすごく特殊なデザインになっていて、そこでIKEA側の希望と住民側の希望の折り合いをつけたという事です。まぁこれは開店してみないと分からないという事なんですけども。IKEAというのは日本でもそうですけど、かならず郊外に、周りに何もないところに作るわけですが、こういう町なかに進出するっていうのは初めてのケースだそうです。

で、ここからはフォールグの一階でアーティストに貸してたという話ですが、その人たちがどうなったかという話です。クルトゥーア・エタージェという場所を得たと言っています。これは後で出てきます。アトリエを安く維持するためにも、市が援助をしていると。で、ここがグロースベルクシュトラーセの大体の雰囲気ですね、こんな感じになってます。右側のこの板が工事現場を囲っている壁になります。その壁でですね、この地区の歴史を描いた写真や資料なんかを展示しているわけです。で、ここが今工事している真っ最中なんですが、巨大な敷地です。で、これがさっき言ったフォールグで住宅として改修された建物です。ただ外側だけではなくて、中身の設備も全面的に改修してます。で、ここがクルトゥーア・エタージェというアートスペースになります。彼女がここの責任者になります。今降りてきた方が、芸術監督ですね、キューレターのトップです。さっき言ってたやつですね。2009年に、一時別のところにアーティストは移動してたわけですけども、この建物ができて、また新たにここに戻ってきたという形になっているわけです。まぁ1000㎡というかなり広いスペースになっています。これがギャラリースペースになります。この時はフェスティバルがありましたんで、南米と中米のアーティストの作品が展示されていました。ただ、制作はハンブルクで行われていたという事です。これは作品の写真ですけども、二枚の写真が横に並んでいて、これはハンブルクに住んでいる移民の人なんですけども、その人の日記ですね、右側がその人の部屋という、こういうのを対にした写真です。文字ですと読めないので、まったく何を考えているのか分からないんですけども、写真で暮らしぶりを見ることによってその人の暮らしぶりが分かるという作品でした。この奥にギャラリースペースのアトリエがあります。貸アトリエですね。何人か紹介してもらいました。ここはデザインの事務所ですね。彼女はグラフィックデザイナーで、彼はテクストを書く、そういう役目らしいです。他に3人のデザイナーと共同でここを使って事務所として使っているという事です。なんでここに来たんですかって言ってます。ここを運営している人と知り合って2年くらい前からこのスペースの事は知ってたんですが、今度新しくなるという事も聞いて、スタッフの人と相談して、応募して選ばれたという事です。まぁこういう自由業の私たちにとってはちょうどいいスペースだと言っています。こっちの人はアーティストですね。版画とかシルクスクリーン、あるいはコンピューターを使ったグラフィカルなアート作

品をつくっているという事で、大学なんかでも教えているという事です。このスペースでシルクスクリーンの教室とかワークショップなども行っているという事でした。彼女は、後ろにあるように、ものすごく大きな機材を持ち込んでいて、プロのアーティストという感じでした。まぁここは、今アーティストが別のところでレジデンスしているので、居ないんですが、どんなアトリエスペースかという事で見せてもらいました。ここも一人でじゃなくて、数人で使っているという事です。

今見た一方では IKEA の誘致のような大きな店舗、世界的な企業を誘致するみたいなこともやりつつ、他方ではクルトゥア・エタージェのようなオルタナティブ的なスペースを活用していく、あるいは援助していくという、これの全体をまとめていくのは Steg という事ですね。この両方の側面でまちづくりを進めているという事です。他にもいろいろあるんですが、ここでは抜粋していくつかご紹介いたしました、以上です。

久堀：それでは続きまして、三番目に入りますけども、本共同研究 3 年間続けてまいりました、この研究プロジェクトの成果と展望につきまして、引き続き研究代表の大場先生からご報告を頂きます。

大場：えぇそれではこれも資料がございますが、時間の関係で少し前半は端折りながら話をして参りたいと思います。この研究プロジェクトを 3 年前に立ち上げた時の研究背景は、このようなことを考えておりました。特にですね、我々の関心の発端というのは、こういうようないろんなプロジェクトをするんですけども、その中で、成長するところと、成長から取り残されるところとの間で、格差拡大をしてしまうのではないかと。そういう中で、ハンブルクと大阪、そういったところで比較が可能かという事を考え始めたわけです。特にですね、共通性の中で、下の二つですね。こういったところ、最近の人口の回復傾向というのが、どういったところにその理由があるのかを含めて、比較研究をしてみようと思ったわけです。

特にハンブルクを取り上げたのは、単に姉妹都市というだけではなくて、上にあるような、取り組みが早いという事もありますし、もう一つ重要なことは、欧米先進国の中でもこの都市は、他の都市とは全然ちがいまして、今でも成長しているという事です。人口増加率が高いので、当然それに関わっていわば、住宅需要は大きく、放っておけば家賃は上昇傾向になります。そういう中で、どのようなまちづくり、そういったものが可能であるのかという事がポイントになるわけですが。あらかじめこちらで調べたり、現地の人と話し合うことによって、市内の本来なら非常に衰退の著しいところがですね、ザンクトパウリというところを取り上げたわけですけども、そうしたところがむしろトレンディなエリアとして、近年若者に非常に人気があるわけですね。そういった事業に直接に関わったメンバー、具体的には Steg という組織でもありますけども、そういったところから先進的な取り組みを学んで行ってですね、ここに書いてありますように、市民文化を基礎においた住みごたえのあるまちづくりモデルを提案できればな、というのが当初の思いでした。特色は日独の専門家グループのチーム編成であり、現在会場をお

借りしております、住まい情報センター、大阪市、それからハンブルク市の期間と連携を取って進めてまいったものです。

で、これがその日独の事例地区のプロフィールですけども、どちらも都市の玄関口、かつては港が玄関口でしたので、そういった港湾に近接したインナーシティとして発展を遂げた地域で、九条の場合と、ザンクトパウリの場合をそれぞれ特色を簡単にまとめておきましたけども。どこがこの二つの最大の違いかと言いますと、九条は非常に安定しているんですね、住民が。世代を超えて数世代にわたって住み続ける、ですから、こういった商店街の活性化が活発ではあるわけですけども、ザンクトパウリの場合は住民が、一部はもちろん古い住宅に住み続けているんですが、他方で学生や若者が流入することによってかなり住民層の交替も見られるという、そういった場所でした。そこを 21 年度から今年度にかけて、このような形で映像を撮ったり、情報を収集したり、フォーラムとかシンポジウムをやったりという形で、もちろんここには書いていませんけども、研究の打ち合わせというのは頻繁に私たちは行っているわけですけども。まぁそういう中で、この 25 年間のザンクトパウリは非常に衰退していたり、あるいはイメージの悪いエリア、夜の街、歓楽街というところから、活気のある文化娯楽地区に変わって行ったわけです。で、特にイメージの話というのは、実は前回ハンブルクでやったシンポジウムでもかなり話題になっておりまして、さらにその前の大阪シンポジウムでもそうなんですが、もともとの夜の街という歓楽街ではなくて、企業家ですとか音楽の拠点であったり、あるいはドイツのクリエイティブなホットスポットであったり、可能性の街、そういったフレーズで呼ばれるようになったわけです。そのような変容を主導したのは誰かという事ですが、私たちが注目したのは Steg の活動だったわけです。

Steg に関しては、先ほどのビデオの中でも、これはアルトナにある事務所ですが、ポイントになるのは二番目の地域密着型の再開発の担い手であるという事です。Steg という機関はもともとはハンブルク市が 100%持ち株の会社だったという事もありまして、ハンブルク市から実質事業の 80%を受注しているわけですけども、今ではハンブルクを超えて、キールですとか、西部ドイツのドルトムントですとか、そういったところにも事務所を抱えて活動をしているわけですけども。そのポイントになってきますのは、地域密着型で事務所を抱えていろんな情報を提供しつつ、住民たちの相談にも乗っているという事ですね。そういったハンブルクに見る都市更新事業の評価なんですが、すでに前にもビデオはお見せして、今回のビデオもそうなんですけども、キーワードとしては環境の話ですとか、持続可能性だとか、そういう新たな再生コンセプトを取り入れながら、一方でもともとの社会住宅制度というのはいわば比較的所得等が低い人々に対して安定した受託を提供するというドイツ独特の制度なんですけども、その手法を使いながら再開発事業を行っていくという事になります。

したがって、キーワードはいろいろあるんですが、先ほどの社会住宅制度との関係で言いますと、地区の家賃水準が値上がりするのを防止しながら既存コミュニティを維持

する。あるいは、新たに学生ですとか若者が入ってくる仕掛けを作ってバランスのとれたコミュニティを実現したり、それから一番下にあるようなストックの活用等があげられるわけです。このようなものを大阪のまちづくりにどう生かすのかという事をこれから話を進めてまいりますけども、まずその時に注意しなければいけないのは、ヨーロッパの建築物を建てる場合に比べて、日本の場合は緩やかなんですね、規制が相対的にですけども。という事になると、まちづくりというのはどういったものかというと、本来緩やかなので、ある程度気ままに建てられてしまう、あるいは空間をつくられてしまうという事に対して、公共の福利を実現するための計画、地区詳細計画という、もともとドイツ版の非常に細かな厳しい都市計画の手法なんですけども、それの日本バージョン。ただし、それは法的な規制だけではなくて、紳士協定も含めるような、いわば目的に応じた個別テーマの街づくりというのは、別にこういった建築の自由／不自由に観点に立つ／立たないに関係なく、1980 年代から進んできたわけで、それは別の言葉で要約しますと、まちづくりは日本版の地区詳細計画という事だけではなくて、地域独自のコードづくりではないかなという風に思われます。

では、そういう中で大阪ではどうかという事なんですけども、前回のハンブルク・シンポジウムでもテーマになりましたが、歴史のある大都市の潜在的な成長力を生かすにはどうしたらいいか。現実にハンブルクの場合はザンクトパウリにしましても、アルトナにしましても、衰退地域から再生を遂げつつあるわけですね、それに対して大阪の場合はどうかというと、一つは不動産の建て替え、更新サイクルが短かったり、あるいは先ほどの九条のような場所、あるいは空堀でもそうなんですが、そういったところに新たな住民が入ってこようとしてもなかなか溶け込むのが難しい。そういう面では、一番初めの報告の中で、シンポジウムの後のディスカッションでこのようなテーマがありましたというのが出てきたんですけども。新旧住民の物理的、あるいは精神的乖離が大きい。これは大阪に限らず、日本の都市って言うのはそういう傾向が強いと思います。

そういう中で、ハードの面ではここに取り上げられているような、右側がこれ以前もお出ししたんですが、九条にはこのような地域資源がありますよと、だからそういった地域資源を発見し、活用することがポイントになるわけですけども、その場合にたぶん上の二つは比較的イメージがわきやすい。たとえば長屋とか町屋を店舗に転換するだとか、工場倉庫を再活用するとか。それだけではなくて、次は井路(いじ)、といいます。路地の事ですが。ですとか、下の写真にあるような、お地蔵さんとか、市場のにぎわい、というような下町ならではの、何世代にわたって住み続けられている住宅地域ならではの界隈性を生かすようなそういった視点、そういった装置を、まぁハードの側面ですけども、活かすことが必要ではないかと。

一方でソフトの面ですけども、これは前回のハンブルクのシンポジウムでも話題になったんですけども、バランスのとれたコミュニティを実現するためには、若者、学生等、新たな人たちの新規流入の促進が必要かと思われるんですけども、そういった場合に考

えられるのは、新しい住民にとっての住み心地のよさ、住みごたえ、このプロジェクトのテーマでもありますけども、それを追求する必要があるかと思います。で、という事になると、住宅の改修がジェントリフィケーションを招いた先ほどのビデオにも出てきました、オッテンゼン、アルトナのグローセベルクシュトラーセの反対側のところですとか、東京の向島などとは異なる第三の道を追求すべきではないか。それから九条をベースとして取り上げる場合に、九条はザンクトパウリと違って、実際に私たちが調べて分かったんですけども、非常にエリアが狭いんですね。エリアとしての一体性を維持した構想を考えるためには、近代大阪の西の玄関口として九条だけではなくて、本田(ほんでん)ですとか川口、そういったものをセットする必要があるであろうと。それから様々なアクターをつなぐネットワークの構築、もちろん重要なんですが、それは私たちが研究対象にしておりました、ザンクトパウリのエリアマネジメントはこのような仕組みになっておりまして、ちょうど真ん中に全体のキーを担う役割として、Steg があります。こういったコーディネーターである Steg、それを核としたアンブレラ型、全体を統括するようなエリアマネジメントが必要になってくるのではないかと思います。これ、いろんな形で補足などは可能ですが、時間の関係もございますので、いったん報告としましてはここで切りまして、ご質問等ありましたら、そこでお答えしたいと思います。

久堀：それではここで、最初申しました通り、休憩を取りまして、質問用紙に質問をご記入いただきまして、取りまとめて、その後質疑応答としたいと思います。これから 3 時 10 分まで休憩にしますので、これをお書きただきまして、受付の外のところでアンケート回収と同じ箱で回収いたしますので、お願いいたします。

第２回公開フォーラム記録（その３）

報告者：
　大場 茂明（研究プロジェクト代表・大阪市立大学教授）
　高梨 友宏（大阪市立大学准教授）
　海老根 剛（大阪市立大学准教授）
司会：
　北村 昌史（大阪市立大学教授）
　久堀 裕朗（大阪市立大学准教授）

久堀：それでは最後になりましたけども、質疑応答と補足説明という事で、最後進めてまいりたいと思います。この時間の司会進行を文学研究科の北村昌史先生にお願いいたします。

北村：はい、この部分の司会を担当いたします。文学研究科の北村と申します。今、質問用紙を書いていただきまして、今のところ 4 件出ておりますけども、よろしければ今書かれておりましたら、前の方に回していただければと思いますが、よろしいでしょうか? それでですね、一番重要というかなんとなく関心が集中している部分なんですが、Steg という団体の性格について、たとえば森部さんとかから質問を頂いております。森部さんが書かれたことをそのまま申し上げますが、Steg というのは事業主体でしょうか、それともコーディネーターでしょうか。それから、Steg の法的性格は日本における公社ないし、公団のようなものでしょうか?というものですね。それから 3 番目、Steg の資金はどこから来ているのでしょうか、という三つの質問。Steg という団体の性格に関する質問が出ておりまして、ここらへん最初に明確にしておかなければいけないと思いますので、それについては。海老根先生。

海老根：Steg という会社は直訳すると、都市開発更新会社です。で、これはもともと先ほど大場先生も言いましたが、もともとはハンブルク市の公社でした。つまりハンブルク市の公共の組織でした。ですが、今先ほども出てきましたが、レスナーさんって言う人が社長をやっていますけども、彼がある時期に公社でやっている、確かにそれは市のプロジェクトに従ってやるんですが、公社でやっている限り非常に不自由な側面があるわけですね、逆に言えば市のプロジェクトしかできないし、市が決めた枠組みの中でしかまちづくりができない。様々な不自由さを感じまして、2003 年にいわゆるマネジメントバイアウト、MBO と言いますけど、経営者買収という形、経営者が株を全部買うと、そういう形で民営化しました。ですので、今は厳密に言えば民間企業です。民間企業なんですが、大場先生もおっしゃいましたけど、ハンブルクに根差しており、ハンブルク市が様々に行っているこういう住宅関係の都市再生プロジェクトをメインで受注している。収入の 8 割前後はハンブルク市のプロジェクトを受注しているという、非常に変わった

形態ですね。で、一昨年実は彼らがこちらに来まして、シンポジウムをしたり、こちらの様々な UR の方々とかとお話をする機会があったんですが、日本にはそういう形のものはないですね。そういう形の組織形態になっています。で、資金はどこから来ているのかという事ですが、公団住宅のようなものは民間企業になるにあたって、市が持っていた様々な住宅の管理を一括して引き受けることになっているんですね。その管理業務が基本的にありまして、それが基本的な収入源になっていると。かなり大量のハンブルクにある公営住宅のほとんどを Steg が管理しているという事で、そこが収入源になっていて、それゆえにある意味では民間企業ぽくないプロジェクトの進め方ができるという事になっています。最初の質問については、大場先生の方がいいのではないかと思います。

大場：えぇ両方兼ねています。

海老根：他にも質問した方がいいんじゃないですか?

北村：一応私どものが理解している Steg の性格はこのようなものなんですが、なおかつ分かりづらい、もう少しここら辺はどういう事なんだという事を明確にしてほしいという質問がありましたら、挙げていただければ。

海老根：ちなみに去年ですね、インターネットにビデオが上がっています。それは Steg が行った様々なリノベーション、コンバージョンの事例を集めたビデオを作成しまして、インターネット上に上がっております。タイトルがですね、「Steg と歩くハンブルク」というタイトルになっています。そのタイトルで検索してもらうと、おそらくビデオが出てきます。40 分くらいのビデオで、ハンブルク市内で Steg が手掛けた様々なプロジェクトが紹介されていますので、そちらを見れば具体的に活動がわかるかなと思います。

北村：Steg について何かほかに質問はございませんか?なければ、今の質問と絡んで、池尻さんから質問用紙に詳細な、非常に印象深い話であった話と、都島区の方で事業を進めておりますという事です。語られた後に、まちづくりの建築費用について、これが一体どんなふうになっていたのかという質問になっておりまして、この点大阪との大きな違いであろうという事であります。この点については Steg の費用の回答である程度の回答になっているかと思います。それからですね、次の質問に進めてまいりますけども、Steg のご質問がございませんでしたら次に、川辺様から Steg と IBA の関係を説明してほしいというものですので、大場先生行きますか?

大場：IBA というのは、直訳すると国際建築博覧会なんですけども、いわゆる千里ですとか花博といったものではなくて、いわば住宅ですとかもうちょっとでかい建造物、そういった現場で取組み、実験的な取組みを行って、同時代それから後世に残していくというドイツ独自の建築をベースにしたまちづくりのプロジェクトと言っていいかもしれないですね。で、ある意味プロパガンダ的な意味合いもあるかと思います。一番典型的なのは、東西両ドイツが分かれていたときに、IBA ベルリンというのがありまして、IBA そのものはちょうど今から 100 年ちょっと前にダルムシュタットというフランクフルト

の近くの街があるんですけども、そこにマチルダの丘というのがありまして、そこでアールヌーヴォーの邸宅をつくって展示したという、昔日本でも住宅博覧会というのがそういったスタイルだったんです。住宅建築博覧会。というものがもともとの起こりで、それから住宅を離れて公共建築ですとか、工場のコンバージョンなどに力点が変わって行ったのですが、ベルリンの場合はちょうど東西ベルリンの境界のところに、新しいコンセプトの住宅を東側に見えるように建てる、東ベルリン側も西ベルリンにもっともすぐれた当時の東ドイツの技術で作った住宅を建ててみせるという、それがプロパガンダの一番典型的なものなんですけども。特に最近では IBA ハンブルクもそうなんですけども、高いプロジェクトをボーンとやるんではなくて、むしろ小さなプロジェクトを 100 いくつか、それは個人ですとか、市民ですとか、企業ですとか、自治体ですとか、そういったものの提案を受けてそれぞれにお金を少しずつ援助していく。もちろんそういった提案者もお金を出すわけですが、そういったプロジェクトに変わってきています。なので、もちろん直接的な担い手は IBA ドックというさっきビデオに出てきましたが、あそこに事務所があるんですけども、彼らがやっているのは主に広報機能と、基本的には広報機能ですね。そういったものです。それが IBA の話です。

海老根：そういう IBA って言うものがやっています。これは 7 年くらいでハンブルクだけでやっているわけではなくて、ドイツ各都市で回って行くんですね、巡回していくんです。で、さっきも言いましたように、建物を展示してそれをぶっ壊して別のところに行くんじゃなくて、実際にそのあとにそこに人が住み続ける、使われ続けるものを、要するに現物を建てていくと、IBA を通して町が変わっていくというものです。Steg はここでオープンハウスというプロジェクト、さっきの三つのテーマがありますけど、ここで言うと気候変動かコスモポリスといったテーマと絡んで、オープンハウスというプロジェクトの運営主体という事になって IBA が 150 万ユーロをそのプロジェクトに補助しているという事です。IBA が全体の博覧会を運営していて、その一プロジェクトとして Steg がオープンハウスをやっているという関係になります。

北村：川辺様のもう一つの質問なんですが、かなり大きなものなんですけども、今ハンブルクの都市更新事業の当初の目標に対してどのような成果があったのかという事について、どのように評価ができるのかという話を伺いたいという事ですが、これは大場先生ですかね。

大場：当初の目標?えぇあの、ハンブルクに限らず、都市更新事業一般の評価につきましては、みなさんにお配りしたプリントの、始めの方ですね、ビデオの前にお話しした方の一枚目の右上かな、地区更新プロジェクトの問題点というのがあります。この中では二つ社会的都市と都市改造と上がっているわけですが、その中で上の社会的都市という方が結構地区の数が多いんですけども、全国的に。それに関する中間成果をまとめた報告書でその下に書かれているような問題点が上がっているというわけですね。比較的目に見えるような形の道路を広げましただとか、ユニバーサルデザインにしましたとか、と

いうようなものは書きやすい、見えやすいので、まずそれが先行して、本当に大事なですね、たとえば経済の新興、それによって地元の住民の雇用が進むという話があまり進んでいなかったわけです。じゃ具体的にハンブルクがどうだったかという事ですが、今日も少し説明があったんですけども。たとえばクリエイターが来ますよとかアーティストが来ますよという事で文化をベースにしてまちづくりが進んでいますよという事が、言って言えない事ではないですが、もともとそこに住んでいた人たちにとってそれがどのような影響を及ぼしているのかという事は直接的には伝わってこないんですね。

地域全体のひょっとしたら所得水準は、その人たちがやってくることによって、クリエイターや自由な職業を持っている人たちがやってくることによって上がっていくかもしれない。でもそれはジェントリフィケーション。むしろ大事なのは、そういったアーティストが、刺繍の話がビデオの中に出てきましたよね、刺繍を地元の住民、それはいろんなナショナリティを持つ人々ですが、そういう人たちに教える、そしたらば彼女たちがそういった刺繍をすることによってアートを通じて自分たちがパートタイムかもしれないけど、仕事ができる。それを今度は町なかのハンブルク市民に売りに行くことによって自分たちの副収入を得ることができる。それが一つの文化に基づくまちづくりの事例だと思うんですね。それが軌道に乗れば、かなり当初の設定、たとえば持続可能性だとか、ヴィルヘルムスブルクだったらコスモポリスだとかそういうようないろんなものがテーマとして挙がっていますけど、特に問題なのは箱モノを作ってどうのこうのという話ではなくて、確かにエコ住宅とかパッシブハウスがあかんとは言いませんけども、作ったら確かに目に見えた成果なわけです。だからドイツの住宅の場合も 2 重窓、3 重窓にします。エネルギー効率を高めた住宅はその分補助金をどんどん積んでいくわけですね。うちも最近風呂を直しましたけども、あれってエコポイントになるんですね、そんな話はどうでもいいんですけども。たとえばね。

というような話ではなくて、実際に目に見えない形で地元の雇用をどうするのか、地域経済の振興をどうするのかという事に関して、たとえばアートのような、アートそのものをポーンと落下傘のように上からつけるんじゃなくて、それを地元の住民にどのような形で、一時しのぎの仕事ではなくて、昔のちょっと前の地区の再開発、地区振興はそういったパターンなんです。たとえば学校を建て直すプロジェクトをしましょうねと、そのために何十人必要だから地域の皆さん協力してくれますか。アルバイト代払いますよ。でもそれは一時で終わりでしょ?先ほどたとえばあげたような工夫が必要ではないかなと、それがいわばハンブルクの都市更新事業と言ってもいろんなタイプがありますけども、私たちが去年の秋に取り上げた場所に関する一つの回答はそれかなと思います。

北村：えっと、この点も終わらせて次に進みたいと思いますけど、電線とかの問題ですね、地下にするとかの問題ですけども、ハンブルクとかドイツでは問題になっていないでしょうか、という事ですね。要するに美しい町づくりのためというご質問なんですが、これあの〜、電線とかの問題ではなくてこういう都市更新事業の際に町の美観、こういっ

たものがどう取り上げられているかというのも含めて、回答を、高梨先生にお願いいたします。

高梨：すみません、私この方面の専門家ではありませんので、一般的にドイツの町にはシュタットプランと言う市役所に保管されている町の全体像、地図と言いますかね、立体的な造形をつくったものが元としてあって、たとえば戦争で壊滅状態に陥った町があっても、シュタットプランに基づいてもう一回建て直すという事をやってますね。それは屋根の色を一つに決めるとか、建物の高さを一律にするとか、いろんな制約を設けて復元していくと、そこには全体の景観というものに対しての配慮が根本的に含まれているのではないかと思います。そのあたりから、先ほど大場先生の話ですかね、土地の再利用に対する制約が日本の場合は非常に緩いけれども、ドイツではそれが厳しい、そういう事にもそれが表れているんではないかと思います。ちょっと漠然とした話で申し訳ないです。

北村：まぁちょっと補足をすれば、電線などはあんまり見えないですし、日本人みたいにベランダに外から見える形で洗濯物干したら、大体、住宅管理する会社の方から手紙なり電話なりかけてきて、そういうことやったらいかんという事がドイツでありまして、そこら辺の公共的な空間に対する美観に対する規制というのが行政レベルでも、住宅管理会社でも、住民側でもきっちりできているのがドイツなのかなという感じです。たぶん日本なんかですと IKEA なんかが町なかにできるとすると、たぶん黄色と青で作っちゃうんじゃないかと思うんですけども、ドイツではやっぱりいかんというところが大事な点ではないかと思います。というところでですね、15 時半まで予定しておりましたが、できればもう御一方ぐらいからフロアから手を挙げていただければと思うんですが、いかがでしょうか?ないですか?

質問者 A: 日本の人とヨーロッパの人の新旧の住民の精神の物理的な乖離っていのは違うという話があったと思うんですが、ヨーロッパの人と日本の人はどういう要因で差が生まれているのかということを教えていただいたらと思います。

北村：誰が答えましょうか…。

大場：書いたのは私ですから。それはちょっと直接的な回答ができるかどうか難しいんですが、たまたま九条をドイツ人の大学院生と 10 人くらいと一緒に回って、そのあとにコスモスクエアの駅前でたくさんマンションができているんですが、そこを見せて、船に乗った後で、ATC のところでディスカッションをしたことがあるんですね。私にとってどっちの街が住みやすいか、私って言うのはドイツ人学生の事ですが。彼らにとってどっちの街が住みやすいか、いずれにしてもニューカマーなのは明らかなんですね。それはたとえ、同じナショナリティの人であっても、そういった場合に自分たちとしては九条よりもコスモスクエアの新しいマンションの方が住みやすいという事でした。それは新しい住宅地だから自分たちも同じスタートラインに立って一緒に街をつくっていくことができる。それに対して九条のように、世代を超えて住み続けているようなそういう

町は住みごこちはいいんですよ、そこでずっと代々住み続けている人たちにとっては。でも、それは本当に新しくやって来たいと思う住民にとって住みやすい町なのかなと。ダメだとか、そういうのではなくて。

質問者 A：ヨーロッパの方が新しいものを受け入れるのがオープンなんですかね?

大場：それはオープンな部分ばかりではないですね。日本の方がより閉鎖性が目立つのかなという事です。もちろん日本の郊外の住宅地もこれからどんどん問題を抱えて行くようになると思いますけども、もともとバラバラでむしろ僕の個人的な考えですが、新しいマンションとか郊外の新興住宅地に特に爆発的に増えた 70 年代とかそれ以降にそういうところが好まれたのは、逆に非常に密接な近隣関係を嫌ってそういうところに移ったという事が無きにしも非ず。そういった近隣関係のうるささ、ありがたさ、おせっかいさはドイツの方が明らかに強いです。でも、強くても昔のようなおせっかいという事を越えて、最近ではドイツではむしろどういったところが問題になっているかというと、おせっかいで済まずに隣人間の訴訟が非常に多い、という事も聞きます。だからある面、非常に密接な近隣関係をわずらわしいと思っている新住民も増えているんだなと思っています。そうすると、共同研究のテーマである「住みごたえのある」とか、「住み心地の良さ」っていうのは非常に難しいんです。誰にとってのものなのかと。それはひょっとしたら、九条のような伝統的な商店街を中心とした町工場もある、そういう下町は代々住んでいる人にとっては非常に住みやすいし、住みごたえがあるんだと思います。別に九条が問題があるとかそういう事ではないですよ。一方でそういうところが自分たちだけではなくて、関心がある人たちに入ってきてもらいたいという風に思う場合にね、そういう風に思う人たちにとって、どういったところを整備していかないといけないのかなというところが、今日も書きましたけども、考えて行かなければならない問題かなと思います。たまたま、ザンクトパウリっていうのはある面で面白いところで、いったんどーんと衰退するから誰も見向きもしなくなった。だからそういうところに若者とか学生たちが入って行きやすかった。そういったところに対して、拒もうとするような伝統的なコミュニティが多分なくて、衰退してたからできたんじゃないかと思います。そんなところでいかがでしょうか。

北村：たぶん 100%納得していただけてないかと思いますが、このまちづくりに関して重要なポイントだと思います。ご指摘いただきまして、どうもありがとうございます。えぇ他にどなたかあえて最後に一言という方は？

質問者 B：:すいません、あえて最後に一言。大変失礼な質問やったら勘弁してください。そもそもこういう都市問題を文学研究科の諸先生方がなさるというのはどういう意味合いを持っているのでしょうか?ふつう都市問題でしたら、建築関係の専門家とか、そういう方が大体色々とされると思うんですよ。実は、私は大場先生の講義にも科目等履修生として二回ほど受けさせていただいたんですけど。私の興味の半分は、文学の専門の先生、文学部の専門の先生がこういう都市問題に取り組まれるんだろうかと。私の付き合

った他の先生方といろいろ違った見方だろうと、言うのが私の頭の興味の半分を占めているんですよ。ちょっとそのあたりの文学研究科の先生方が都市問題、都市のリニューアルに取り組まれるお考えを、失礼でなかったらお教えいただければと。たぶん地理学とは何か、地誌学とは何かという事だろうと思いますけど。

北村：じゃまず一応代表として大場先生から。

大場：順番に答えてもらいますよ。私は文学部の出身であって、文学研究科の教員ではありますが、私は地理なので、地理は建築ですとか都市計画と接点があるんですよ。私自身住宅だとか土地政策だとかに関心を持ってドイツで研究してましたので、私がなんでまちづくりの事をやるかというのはある面明快なので、他の人に。

海老根：僕自身はどっちかと言えば文化理論とかそういうことをやっているんですが、僕の関心で言えばむしろ芸術とかの側面です。つまり現代の、みなさんも行ってらっしゃった方がいらっしゃるかと思いますが、瀬戸内国際芸術祭であったり、愛知トリエンナーレというところありましたけど、アートの新しい現在の非常に大きな流れとして、ああいう過疎の街であったり、都市であったり、都市の名古屋であれば長者町と言われる昔の繊維問屋街ですけども、そういうところのコミュニティがバラバラにほどけてしまったところの中にどうやってもう一度コミュニティの絆を取り戻す、しかもそれは現地の人だけじゃなくてよそ者を受け入れる形でのコミュニティ再生ですね。あるいはその人々の間に、場所に根差したコミュニケーションを満たすという事がアートの一種の役割として浮上しているという事があるんですね。たとえば直島なんかではもう使われていない公民館みたいなところに、直島じゃなくて手島でしたかね。手島に空き家がたくさんあるんですけども、その空き家の扉を集めてきてそれをトンネルみたいにして、ある種の構築物をつくるみたいな芸術作品があるんです。そこでは、言ってみればその町で暮らした人々のいなくなってしまった人々の記憶みたいなものがあって、そういうものの痕跡をある作品として、あるいは大きな構築物として作り直していく、集めてくるわけですね。だけど、来る僕らは全くそんなの知らないわけです。よそ者なわけです。そこに住んでた人にとっては、あ、これあそこの家にあった扉だっていうもちろん個人的な記憶はあるかもしれません。だけど、そこに来る人たちはそういう記憶がない。ないんだけども、こういう人たちの生活の痕跡があるんだって形で、そこにあったかもしれない人々の時間というものをよそ者に開くって言う可能性がアートにはあるんですね。僕の関心というのはそういう側面で、芸術っていうものが単に美術館の中にあって、それをただ単にどういう意味だろうって鑑賞するだけではなくて、ある種の作品をつくるプロセス、あるいは見るプロセスが人々の間に何かつながりをつくっていく、あるいは場所との関係を再定義していく、そういうことがあります。その関係で、興味があるという事ですね。僕は、別に工事現場とか、どんな材質で断熱材がこんなくらい厚いという事にははっきり言ってあんまり興味がないです。そういう側面じゃないところで関係があるのかなと思っています。

高梨：すみません。私は美学を専門にしていまして、このプロジェクトに本当に入っていいものかどうか、最初ずいぶん大場先生からお話を頂いたときに迷ったんですけども。最終的にいろいろ関わらせていただいて、だんだん自分の中で明確になってきたんですが、最後に海老根先生が先ほどおっしゃったようなこと、芸術を通して何か人が結びつくって言うことがあるんじゃないかという事、これは前から私も考えているところでした。海老根先生は表象文化論と言いますか、表現文化学の専任をされていて、私は哲学をやっておりまして、どちらかというと芸術と言ってもかなり哲学寄りの捉え方をしております。その場合にカントなんかが言っているように、普遍妥当的な理性的判断みたいなものが我々の理解可能性、お互いを理解する可能性を開いていくんじゃないかと、世代とか地域とか文化的な歴史とかそういうものの違いを越えた、何か人間としての普遍的理性といったところから、これは大所高所からといったものになって、あまり問題の解決にはならないかもしれませんが、そういうものをむしろ信じたいと思っておりまして、そういう点から今回この図らずも出てきた、オールドカマーとニューカマーの間の理解可能性とかそういった問題をとらえて行きたいと今では思っております。ですから、プロジェクトに誘っていただいてよかったなぁという風に思っております。

久堀：私は、専門はそこのプログラムにも出てますけども日本近世文学で、人形浄瑠璃を専門に研究しております。まちづくりの方は全く素人なわけですけども、人形浄瑠璃、伝統芸能ですね、伝統芸能も現在に伝わってきていて、今に生きているそういう芸能ですね。今私は淡路の方の浄瑠璃なんか研究していまして、南あわじ市に行って色々事業に関わったりしていますけども、そういうところでは観光に結び付けて人形浄瑠璃を一つのブランドとしてどう生かして、まちづくりにつなげて行けるか、観光客を呼ぶ、そういうことを含めてどう計画していくかという事に関わってきますね。そういうような意味で伝統芸能がどうまちづくりに関係しているのか、というような所でも関心があるという事です。大阪でも、人形浄瑠璃、文楽がこれが一つ代表的な伝統芸能ですけれども、それだけではなくて落語なんかでも天満天神繁盛亭ができまして、あそこの空間って言うのがそれを中心にまちづくりが変わっていくというような所もございますし、そういう意味で関心があるという事で、まだまだ私の場合研究には至りませんけども、ここに含めていただいたという事です。

北村：討論の時間に僭越ながら答えさせていただきますけども、私の専門はドイツの、今まではだいたい 19 世紀の住宅問題の事をやっていまして、その延長線上ともいえるんですけども、私の関心というのは住宅問題を通じて、19 世紀のドイツの市民というのがどういうものだったかというものを解明することだったんですけども、それを最近研究を発展させてやってるテーマが、ブルーノ・タウトという日本にも亡命してきた建築家の建物なんですけども、そこら辺の彼の建物ですが、ベルリンでも今でも一万戸以上が使われているんですが、この十数年間で何が起こったかというと、半分以上の建物が元通りに完璧に復元されてそのまま使うという現象が起こっているんですね。ですから、ブ

ルーノ・タウトというものがなぜそうなったかというところを色々と考えなければならないときに、今現在のブルーノ・タウトの評価も考えなければならんわけでありまして、そういった場合にこういった他都市も含めた 20 世紀の末から 21 世紀にかけての都市再開発とか住宅の更新とか、一定程度の勉強をして行けば、なぜブルーノ・タウトが今もう一回評価されて、まったく同じ状態でもう一回住むようなことが行われているのかという事ですね。これが分かるという事ですね。これがまず第一の、ちなみに私は昨年ベルリンに住んでおりまして、ブルーノ・タウトの設計した家に住んでおりました。これは余談ですけど。もう一つはですね、歴史家の社会的責任というのはよく言われるわけですが、歴史なんか昔のことをやっていて何になるんだという事が、歴史をやっている人間に対して常に問われる質問でありまして、私の場合は今まで 19 世紀の歴史分析に徹して、現実をできるだけ回避して、現実を読み込まない形で 19 世紀を研究してきたんですけども、その成果を踏まえたうえで、ぼちぼち「今どうなっとんのや」という事を考えて研究せなあかんという風に考えていたところで、こういうプロジェクトに話がかかりまして、結構今住宅とか都市に関してヨーロッパでは結構大きな変化があるんだなという事が分かりまして、そういう点でも大変自分の勉強になったんですけども。現実ですね、問題に自分がどう考えるかという手掛かりにするために、私としてはこのプロジェクトに参加しております、という事でよろしいですかね？

これ以上質問ありませんかと聞くと、もっとすごい質問が出てきそうな予感がしておりますので、いろいろと不手際がありましたけども、一応討論はこれで終わりにしたいと思います。

久堀：それでは、超過しましたけども、以上ですべてのプログラムが終了いたしました。長時間お付き合いいただきましてありがとうございました。最後アンケートをお願いしております。この 3 年間のプロジェクトはこれで一応終了ですが、今後の研究につなげてまいりたいと思いますので、ぜひこちらお書きくださいまして、受付のところでお出しください。それではこの公開フォーラム「住みごたえのあるまちをつくる~映像で見るハンブルクのまちづくり～」、これで終了いたしたいと思います。どうもありがとうございました。